

北大 教養教育のすべて

——エクセレンスの共有を目指して——

はじめに

教養教育 (Liberal Education) は見果てぬ夢だと言った人がいる。夢ならば問題はないが、第二次世界大戦後に発足した新制大学にとって、これは現実そのものだった。何も無いところから制度と理念を作らざるをえなかった日本の大学は、そのために長い時間と膨大なエネルギーを費やしてきた。新制北海道大学の教養教育の出発点は1947年4月の「北海道帝国大学大学制度審議会」の設置にあることは明白だが、それが完成したのはいつかという問いに対する反応はさまざまだろう。その中には教養教育に完成などないという意見も含まれる。本書は、現在の高等教育推進機構がそれまでのセンター組織に代わって教養的教育を担い、進学先学部未定の新生を受け入れた2011年4月で完成したという立場を取っている。その間、実に64年の歳月が流れた。本書はその長い物語のダイジェスト版である。

本書のハイライトは2000年代をピークとする疾風怒濤のような教育改革の時代であろう。教授法開発や授業評価などから始まって、カリキュラム開発、授業開発、自然科学実験の総合化、フィールド研修授業の開発、将来の大学教員のための研修へと発展し、ついには大学教員の倫理綱領の制定にまで及んだ。北大では、教養部の廃止以降、教養的教育を「全学教育」と呼んでいるが、1995年に創設された高等教育機能開発総合センターはそれを担うとともに、一連の教育改革プロジェクトの拠点ともなった。センターを創設した廣重力総長と後に続く、丹保憲仁、中村睦男、佐伯浩、山口佳三の4代の総長、及び8代の副学長がその活動を支援し、時に自ら先導した。その拡がりやインパクトの大きさから、筆者はこれを「全学教育運動」と呼んで良いと思っている。運動の論理的帰結の一つとして、入学試験における学部枠を可能な限り取り払う「大きく入り試」が提案され、曲折を経てそれが実現すると同時に、センターは高等教育推進機構へと改組解消された。本書はその意味で、同センターの誕生から終焉までのクロニクルでもある。

全学教育運動には少なくとも3つの特徴がある。第1に、大規模総合大学

が教養的教育を維持し発展させるための有効なモデルを提供しデフォルト・スタンダードとして定着させたこと、第2に、個々の改革に「最良の専門家による最良の教養教育」という北大の伝統的理念を反映させたこと、第3に、その始まりから組織的な授業のアクティブラーニング化を目指したことである。特に第3点について、北大ではいち早く1990年代後半から全学教育を舞台にさまざまなディシプリンによるアクティブラーニング化の試みがなされ、2000年代にはその多くが学士課程教育に組み込まれた。

本書の第1編「北大方式の教養教育」の第1章では新制大学の発足から北大方式の成立まで、第2章では教養部の廃止までになされた組織的検討と、高等教育機能開発総合センターの設置までを取り上げた。第2編「コアカリキュラムと新しい外国語・自然科学教育」の第3～8章では2003年度の第1回特色ある大学教育支援プログラムに採択された「進化するコアカリキュラム」と「平成18年度新教育課程」と呼ばれた基礎教育と外国語教育の改革を中心とした新しい教育課程により学生の学習態度が目立って向上したことを説明する。第3編「総合入試制度と新しい教育支援システム」の第9章では2011年度から導入された「総合入試」(大きくくり入試)制度について述べ、第10章では先駆的な教育研修により学生中心、主題・課題中心、体験重視、対話的・双方向的な、いわゆるアクティブラーニング教育が普及した経緯を述べる。第11章では高校教育・専門教育との接続、単位の実質化のためのさまざまな教育支援システムの整備、また新渡戸カレッジなどの新しい課程の導入について述べる。第4編は結びである。

本書が最初に企画されてから10年もの歳月が流れてしまった。さまざまな事情によるが、結果として北大教養64年目の大きな区切りを本書に取り込むことができたのは幸運だった。その間、忍耐強くお励ましいただいた(株)東信堂の下田勝司社長に心からお礼を申し上げたい。

2016年5月

編者、執筆者を代表して

小笠原 正明

目次

はじめに	i
第1編 北大方式の教養教育	3
第1章 北大方式の成立	小笠原正明 4
第2章 全学教育の出発	
1. 新しい全学教育の構築	新田孝彦 33
2. 全学教育の発展を支える 高等教育機能開発総合センター	山口佳三 41
第2編 コアカリキュラムと新しい外国語・自然科学教育	49
第3章 「進化するコアカリキュラム」から 平成18年度新教育課程へ	安藤 厚 50
第4章 一般教育演習と論文指導	吉野悦雄 69
第5章 体験型の一般教育演習	
1. フィールド施設を利用したフレッシュマン教育	上田 宏 81
2. 練習船を利用した フィールド体験型フレッシュマン教育	猪上徳雄 89
3. ものづくりによる創成型教育	工藤一彦 95
第6章 地域連携型の芸術教育	
1. 北海道立近代美術館に学ぶ	北村清彦 103
2. PMF、札幌と連携した音楽関連科目の展開	三浦 洋 119
第7章 外国語教育の改革	大平具彦・野坂政司 124
第8章 自然科学教育の刷新	
1. 新しい自然科学教育の展開	小野寺 彰 134
2. 次世代型インテグレート科学授業の開発	鈴木久男・小笠原正明 144

第3編 総合入試制度と新しい教育支援システム	151
第9章 入学者選抜制度の改革	
1. 学士課程の変容と入学者選抜のあり方	佐々木隆生 152
2. 「大きくくり入試」導入の意義とその影響	小内 透 164
第10章 進化する教育研修	
1. ファカルティー・デベロップメント (FD) の進化	阿部和厚 168
2. ティーチング・アシスタント (TA) 制度の発展	栗原正仁・細川敏幸 178
第11章 新しい教育支援システムの整備	
1. 全学教育とともに発展した北図書館	望月恒子 189
2. アカデミック・サポートセンターの開設と発展	川端 潤 193
3. 新渡戸カレッジの活動	山口淳二 198
4. 教育評価システムの構築	細川敏幸 203
第4編 結び	209
第12章 高等教育推進機構の機能と活動	新田孝彦 210
第13章 総合的学士課程への展望	小笠原正明 215
参考文献 (共通)	223
あとがき	227
資料	229
年表	244
執筆者一覧	254
索引	256

小笠原 正明 (おがさわら まさあき)

1943年生まれ。北海道大学大学院理学研究科修士課程修了。工学博士。北海道大学工学部助教授、北海道教育大学教授を経て北海道大学高等教育機能開発総合センター教授(1995～2006年)、東京農工大学大学教育センター教授(2006～2008年)、筑波大学特任教授(2006～2011年)。北海道大学総合博物館資料部研究員(2006～2016年)。米国ウエイン州立大学博士研究員(1974～1976年)；ポーランド・ウッチ工科大学准教授(1980年)；スウェーデンスツーツビク研究所客員研究員(1984年)。第3回日本放射線化学会賞受賞(1993年)。

安藤 厚 (あんどう あつし)

1947年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。東京大学教養学部助手(1973～1979年)、山形大学教養部講師・助教授(1979～1990年)を経て北海道大学文学部・大学院文学研究科助教授・教授(1990～2010年)。第3回木村彰一賞受賞(1994年)。

細川 敏幸 (ほそかわ としゆき)

1956年生まれ。北海道大学理学部物理学科卒業、北海道大学大学院環境科学研究科修士課程修了。医学博士。1982年北海道大学医学部助手、カナダ・ダルハウジー大学医学部博士研究員(1990～1994年)、英国国立医学研究所博士研究員(1994～1995年)を経て1995年より北海道大学高等教育機能開発総合センター助教授、2006年7月より教授。2015年北海道大学教育総長賞優秀賞受賞、2016年公益財団法人日本建築衛生管理教育センター表彰受賞。

北大 教養教育のすべて——エクセレンスの共有を目指して

2016年6月15日 初版第1刷発行

[検印省略]

*定価はカバーに表示してあります

編著者 © 小笠原正明・安藤厚・細川敏幸 発行者 下田勝司 印刷・製本 中央精版印刷

東京都文京区向丘1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

〒113-0023 TEL 03-3818-5521 (代) FAX 03-3818-5514

E-Mail tk203444@fsinet.or.jp

Homepage <http://www.toshindo-pub.com>

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO.,LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

発行所
株式会社 東信堂

ISBN978-4-7989-1367-4 C3037

Copyright©2016 OGASAWARA Masaaki, ANDO Atsushi, HOSOKAWA Toshiyuki